

『三つの遣唐使ルート 激動の東アジアにおける孝徳天皇の 外交戦略を読み解く』

関 裕 二

Three Routes to Tang: Decoding Emperor Kotoku's Diplomatic Strategy in a Turbulent East Asia

SEKI Yuji

キーワード：孝徳天皇 遣唐使 中大兄 高向史玄理 新羅道

1 はじめに

孝徳天皇が、晩年2年続けて派遣した遣唐使には、大きな謎がある。1回目は通常通りの北路（百済西海岸）を経由する航路と南島路を経由する船に分かれた。2回目は新羅道という、かつてないコースを選択していたのである。なぜ、3つのバラバラのコースをたどる必要があったのだろう。そのうちの一隻は、危険な南島路を選択したがために、遭難しているのである。孝徳天皇の外交戦略の真意を探ってみたい。

2 『日本書紀』の不自然な記事

『日本書紀』白雉4年（653）夏5月1日条に、遣唐使派遣記事が載る。船は2隻用意され、出航した（この遣使をAとする）。

第1船は大使吉士長丹以下総勢121名が乗り、第2船にはもうひとりの大使高田首根麻呂ら、120名が乗った。

第2船は危険な南島路を選択したようで、秋7月、鹿児島県沖（薩摩の曲と竹島の間）で沈んでしまう。一方第1船は、無事に安全な百済西海岸を通って唐に到着している。

次に、白雉5年（654）2月、（A）の遣唐使船が帰国するよりも早く、押使高向史（漢人）玄理と大使河辺臣麻呂が唐に向かった（この遣使をBとする）。ただし、『日本書紀』に使節の任命記事がないことが、大きな謎として残されている。『日本書紀』は、2隻に分かれて乗り込み、数ヶ月の時間を要して、新羅道を経由して唐の都にたどり着いたと記録する。無事皇帝に謁見した高向史玄理だが、唐で亡くなってしまったのである（死因は不明）。

孝徳朝の遣唐使のどこが謎めくのか、要点をまとめてみよう。

①白雉4年（A）の大使は、なぜ2人必要だったのか。第2船の大使の方が第1船の大使よりも位が上なのはなぜか。

②なぜ、（A）の第1船と第2船は、2つのルートにに分かれたのか。

③翌年になぜあわてて次の遣唐使船（B）が派遣されたのだろう。（A）の第1船が無事に唐に

着いたかどうかは、分かっていない段階で、なぜ新たな遣唐使を送り込んだのか。

- ④ (A) の第2 船に乗り込んだ大使の高田首根麻呂の別名は「八掬脛」だったと『日本書紀』はいう。これは蔑称であり、無念の死をとげた人物を、なぜ悪し様に記録しているのか。
- ⑤ (A) の第2 船の遭難を受けて、急遽派遣された高向史玄理 (B) は、なぜ安全で時間短縮になる北路 (朝鮮半島西海岸の百済経由) を通らずに新羅道を通ったのか。

謎はまだある。白雉4 年 (A) の第2 船が、危険な南島路にチャレンジして失敗した。これは遣唐使船 (遣隋使もふくめて) 最初の遭難事件であり、なぜこのルートを選んだのだろうか。高向史玄理が、百済ルートをとらずに、新ルートで遠回りとなる新羅道をとった理由も知りたいのである。

新羅は朝鮮半島の東南の隅の国だったが、閉ざされた土地でもあった。中国に向かおうとすると、北側の陸路を高句麗に塞がれ、海路を使おうとしても、宿敵の百済が邪魔になった。新羅の悲願は西海岸につながる道を確保することで、6 世紀に実現している。高向史玄理は、新羅を陸路で進み、西海岸に到達し、そこから船で唐に向かったと考えられるのである。

問題は、3 つの遣唐使船が、なぜ異なるルートを選んだのか、である。

3 緊迫する東アジア情勢

6 世紀から7 世紀、中国に統一国家 (隋・唐) が連続して生まれ、陸続きの高句麗は危機感を抱き、長年敵視していたヤマト政権に融和策をとるようになったのである。新羅もヤマト政権にすり寄っている。この時代、多くの文物や高僧が、朝鮮半島から日本に渡って来たのは、中国の脅威ゆえである。朝鮮半島の3 つの国は東の孤島に安住し背後の憂いのないヤマトの軍勢力を頼ったのである。

さらに、かつては、後進国だった新羅が次第に実力をつけて唐に急接近すると、朝鮮半島情勢は、慌ただしく変化していく。643年、長年争っていた百済と高句麗は和睦し、ここから両者の絆は強まり、逆に唐は、百済と高句麗に圧力をかけていく。この一触即発の状態の中で、孝徳天皇は遣唐使を送っていたのである。

ヤマト政権も安穏としていられなかった。643年に蘇我入鹿が上宮王家を滅亡に追い込むと、蘇我氏の専制政治に対する反発が高まり、645年に中大兄と中臣鎌足の仕掛けた乙巳の変によって、蘇我本宗家は滅亡する。これを受けて即位したのが孝徳天皇である。

森公章氏は、改新詔に『日本書紀』の潤色が込められている点を考慮し、一気に改革が進捗したわけではないが、孝徳天皇は徐々に新しい体制を機能させつつあったといい、件の遣唐使は「さらなる知識・文物を唐に求めたものと考えられる」¹⁾と指摘している。また、第2 船が南島路を通ったことについて、「開拓の使命もあったのかもしれない」と、推理している。

上田雄氏も「大化の改新から十年を経て、改革政治を強力に推進しようとする、中大兄皇子を中心とする朝廷が、唐の政治制度や律令制度を学ぶことを火急の課題としている意気込みが感じとれる」²⁾とする。

しかし、東アジア情勢が緊迫する中、複数の遣唐使船には、切迫した政治的・外交的思惑が込められていたはずである。

4 同一政権が3つの目的をもった遣使をした？

強大な唐が出現し、朝鮮半島のどの国も、ヤマト政権を味方に引き入れようとしていただろう。この時代、孝徳天皇は理由があって遣唐使を派遣しただろう。ここで興味深いのは、孝徳天皇の送りだした遣唐使のルートが、それぞれの「目的」を物語っているように見えることである。

まず、南島路を選択して遭難した（A）の第2船の目的だ。

榎本淳一氏は「百済や新羅の助力を得ないで唐朝に通航する海路の開発を図ったもの」^③と言うが、はたしてそうだろうか。のちに遣唐使がもっぱら南島路を経由して頻繁に遭難したのは、朝鮮半島が新羅によって統一されてしまったからである。朝鮮半島西海岸が政敵（この場合新羅）の手に渡れば、利用できなくなるわけで、（A）の第2船も、百済西岸を通れなかった可能性が高いのである。この船が南島路を通らざるを得なかったのは、「百済の国益に反する遣使」だったがためと、推理できるのである。孝徳天皇は唐に使者を送り、「唐と敵対する行為はとらない」と約束するつもりではなかったか。

ここでひとつ気づかされるのは、孝徳天皇のさし向けた遣唐使船が、唐との関係を維持するための必要最低限の施策だったとすれば、百済にとって都合の悪いことになるわけで（唐とヤマト政権がつながれば、百済は滅亡の危機にさらされる）、当然、国家存亡の危機なのだから、唐に向かう遣唐使船の通行を妨害し、あるいは捕縛していたことだろう。

唐にたどり着いた（B）の高向史玄理に、唐の皇帝（高宗）は、新羅が常に高句麗と百済に侵略されていること、危急の折には新羅に援軍を送るように、と命じている（『唐会要』第九九卷）。高向史玄理にすれば、予想どおりの事態だっただろう。

そう考えると、百済の西海岸を経由して無事に唐の都に着いた第1船こそ、怪しい船だったことに気づかされる。この大使を、本当に孝徳天皇は派遣したのだろうか。

ならば、同時に出港して百済沿岸部を通った（A）の第1船は、何を目的に唐に向かったのだろう。この船は、百済の国益に叶った行動をとったから、安全な航路を選ぶことができたのだろう。しかし、同じ政権が送りだした遣使なのに、異なる役目を負うことがありうるだろうか。

榎本淳一氏は、（B）に関して、「中大兄らは、この後、百済を支援し、新羅や唐と敵対して行くことから、孝徳天皇ら親唐派との間で外交方針をめぐる対立があった」と指摘している^④。まさにそのとおりなのだが、短期間の内に送り出された3つの遣唐使船それぞれのルートが異なるから、不可解なのである。

これらの遣使は、きわめて政治的で緊急性が高いから、多くの謎をはらんでいるのである。そして、（A）の第1船と第2船は、外交戦略の違う勢力がそれぞれの立場で唐に使者を送ったと考えざるを得ないのである。だから、第1船は百済を無事に通過し（親百済派だから当然）、第2船は百済を通れず、危険を承知で南島路を選び、唐に向かったが、あえなく難破したのだろう。

中大兄皇子と中臣鎌足は実権を握ったあと百済救援に猪突し、白村江の戦い（663）で大敗北を喫している。つまりこのふたりは親百済派で、（A）の第1船をさしむけたのだろう。『日本書紀』編纂の中心に中臣鎌足の子の藤原不比等が立っていたことが有力視されていて^⑤、その『日本書紀』が、親唐派の第2船の大使に蔑称を与えた意味が分かってくる。

白雉5年（654）秋7月に（A）の第1船は帰国するが、『日本書紀』はこの使節団を「西海使」と呼び始める。これは普段百済使に使う言葉で（斉明2年は歳条、同3年は歳条）、第1船が百済とかかわり深い使節団だったことが分かる。

そして、最後に残った謎が、高向史玄理の（B）の旅程だ。「新羅道」を選択している。『日本

書紀』に「新羅道」の説明はないが、新羅国を頼った道筋であることは間違いなく、新羅の陸路を経由して朝鮮半島の西海岸に出たと思われる。親唐派の新羅の地を経由できたのは、孝徳天皇が唐とつながって百済や高句麗に対峙する戦略をとったことを報告しに行くためと考えられるのである。あるいは、ヤマト政権は朝鮮半島の紛争には介入しないという方針であったかもしれない、それでも、新羅を通過することが可能だっただろう。

百済にしてみれば、唐と新羅に挟み打ちになってしまったことで、もはや絶望的状态に置かれていたわけで、事実、白村江の戦いによって百済は滅亡し、それよりも早く、660年に、1度百済は滅亡していた。遺民達が復興を目論み、白村江の戦いが勃発したのである。

5 中大兄と中臣鎌足は親百済派

同じ政権が、目的を異にする三つの遣使を、短期間のうちに送り込んでいた理由を、改めて考えてみたい。

注目すべきは、高向史玄理が遣唐使として派遣される直前の『日本書紀』の白雉4年は歳条の記事だ。太子（中大兄）は孝徳天皇に「倭京に遷らむ」と奏請して断られると、中大兄は朝廷の主だった顔ぶれ（皇祖母尊＝皇極を筆頭に、皇族や公卿大夫、百官）を引き連れて、飛鳥に移動してしまっている。これは一種のクーデターである。門脇禎二氏は孝徳天皇が「実際に政治指導をやっており、それはとうてい中大兄の比ではありません」⁶⁾と述べるように、中大兄と中臣鎌足が孝徳朝の主導権を握っていたわけではなかった。孝徳朝の要人が次々と倒れ、孝徳天皇の指導力が低下した場面で、中大兄と中臣鎌足は造反したのである。

中大兄らが飛鳥に移動した直後の白雉5年（654）春正月、中臣鎌足に紫冠が授けられている。これは、一連の政変劇に対する論功行賞と読み取れる。中大兄と中臣鎌足はこうして実権を握り、百済救援に奔走し始めてゆくのである。また、高向史玄理が唐に派遣されたのは同年2月で、孤立した孝徳天皇が最後に頼ったのは百済に敵対する新羅（新羅道）だった。そもそも（B）の押使となった高向史玄理は、新羅の金春秋と昵懇の間柄にあった。この点も、重要な意味をもていよう。大化3年（647）に新羅は最高官の金春秋を人質として日本に遣わした。外交使節としてロビー活動をするとともに、日本側の動きを探りに来たということらしい。彼はのちの武烈王だ。優れた外交官で、金春秋は高向史玄理と、よく行動をともにした。石母田正は金春秋について「新羅と日本と唐を連結する外交官」⁷⁾と指摘した。つまり、（B）の遣唐使の意味も、このような背景から考えれば、明確になる。

（A）の第一船に乗り込んで安全な百済経路を使った人びとの中に、中臣鎌足の子の定恵や天智朝の重臣・中臣金の弟の安達が含まれていることは、無視できないのである。第一船は中大兄や中臣鎌足がさし向けた船ではなかったか。中大兄と中臣鎌足がのちに無謀とも言える百済救援を敢行したことを見れば、彼らが孝徳政権内部の野党の親百済派で、孝徳天皇は「百済救済は国を滅ぼす」と考えていただろう。

孝徳朝内部に外交策をめぐる亀裂が生まれ、孝徳天皇は「百済と高句麗には与しない」策を掲げ、これに反発したのが中大兄と中臣鎌足と考えれば、「三つの遣唐使船」の理由が分かってくるのではあるまいか。

(1) 森公章 『遣唐使の光芒 東アジアの歴史の使者』（角川選書）68頁〔2010〕

(2) 上田雄 『遣唐使全航海』（草思社）55頁〔2006〕

- (3) 榎本淳一『岩波講座 日本歴史 第三巻 古代3』（岩波書店）259頁 [2014]
- (4) 榎本淳一（前掲書）259頁
- (5) 森博達『日本書紀成立の真実』（中央公論新社）255～257 [2011]
- (6) 門脇禎二『「大化改新」史論 下巻』（思文閣出版）301頁 [1991]
- (7) 石母田正『石母田正著作集 第三巻』（岩波書店）56頁 [1989]